



ゾクゾク ぞくり…



奇妙でフシギな話ばかり

ブルース・コウヴィル 作 金原 瑞人 訳 岩波書店 933-コ



刑に処され、埋葬された靴屋の息子ブライアンは、死人とは思えないほど怒っていました。大陸を治める王たちは、どの王もほかの王を嫌って次々に戦争ばかり起こしていたからです。ブライアンは、地のなかからはい出て、墓穴から自分の首を拾い脇に抱えたと、王の寝室へと向かいました。翌日、王は、戦争はおしまいにするとお付きの者たちにいます。

(『首を脇に抱えて』)

ゆうれいフェルピンの話

ヴィークランド 絵 リンドグレーン 文 石井 登志子 訳 岩波書店 E-ヴ



なん百年もむかし、フェルピンというわるさばかりする作男がいました。ある秋の夜、教会でフェルピンはシーツをかぶってゆうれいにばけると、仲のわるかったオルガンひきをおどろかせます。つぎの日、村のひとたちが教会にくると、ドアのすぐそとに血がこおっていきたまましんだフェルピンがいました。牧師たちが教会のかべに、かたくなったフェルピンをたてかけると、そのまま百年のあいだフェルピンはたちつづけます。

鬼の橋

伊藤 遊 作 福音館書店 913-イ



小野 篁 は、おもいきったように五条橋をわたりはじめました。妹 が見つかった井戸を見たいと思ったのです。井戸には石がのせられていましたが、篁 は小石を投げいれました。すると、はるかな地底から、かちりという音がして 篁 の魂 も井戸の底へ吸いこまれていきます。気がつくと、篁 は三年前にこの世を去った征夷大將軍、坂上田村麻呂と鬼がいる石ころだらけの河原にいました。

千びきおおかみ 日本のこわい話

筒井 悦子 再話 こぐま社 913-ツ



あるところに、たんものを売り歩く商人がいました。山をこえているうちに、白がくれてしま
います。こまった商人は、高い木の上で夜をあかすことにしました。夜中になると、木の下に、
おおかみがなんびきもあつまりますが、木にのぼることができません。すると、おおかみたちは
猫又をつれてきて長い長い“おおかみばしご”をつくりまします。『千びきおおかみ』

さいごのゆうれい

斉藤 倫 著 福音館書店 913-サ



小5のハジメは、8月に田舎のおばあちゃんちへ行くことになります。近くには空港があつ
て、飛行機の好きなハジメは毎日、空港へ出かけました。お盆の1日目、見たことのない機体か
らひとりだけおりてきたちいさな子は、じぶんをゆうれいだといひます。そして、ゆうれいが減
ってしまい、さいごのゆうれいかもしれないといひました。ハジメは、ゆうれいのネムと友だち
になります。

船乗りサッカレーの怖い話

クリス・プリーストリー 著 三辺 律子 訳 理論社 933-プ



嵐が来て三日目の夜、父さんは、医者をおよぶために家を出ていました。ぼくと妹がひどい病氣
になったのです。そこに、船乗りのサッカレーが断崖のてっぺんにあるぼくたちの家にやってき
ました。ずぶぬれのサッカレーは、暖炉のそばのテーブルにすわります。そして、嵐がおさまる
のを待つあいだ、ぼくたちに旅のとちゅうできいたおそろしくて不思議な話をきかせてくれま
す。

雪女

伊勢 英子 絵 小泉 八雲 作 平井 呈一 訳 偕成社 E-イ



ある村に、茂作と弟子の巳之吉というふたりの木こりが住んでいました。ある寒い夕暮のこと、
ふたりはひどい吹雪に会ひます。渡し守の小屋へ逃げこみますが、眠りこんでしまいました。
巳之吉が目をさますと、白装束をつけた美しい女が、寝ている茂作に白い息を吹きかけていま
す。女は、巳之吉の方をふりむくと、今夜見たことはだれにも言ひていけないと言ひて、小屋か
ら出て行きました。